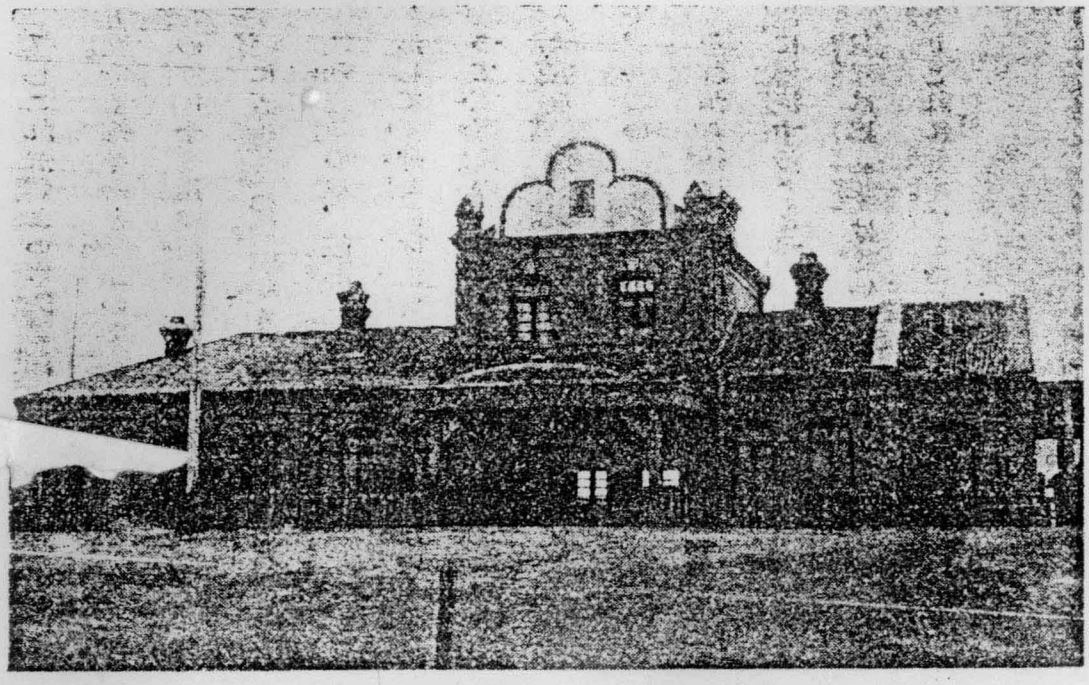
滿洲鉄道建設秘話

（中）

6



吉長時代の長春驛

吉長鐵道の委任經營

村田慤磨

大正七年一月一日以降、滿鐵は支那政府との契約によつて、長春（現在の新京）・吉林間百二十八粁の鐵道の委任經營を引受けた。これは日本としても滿鐵としても、外國鐵道の經營を引受けた最初の事であつて、小さな鐵道とは云ひ乍ら記念す可き出來事である。

私は滿鐵より命を受け運轉主任として滿鐵代表者を兼ね、工務主任、會計主任以下數十名の派遣員を率いて、大正六年の暮も押迫つた三十日長春に赴き、翌三十一日は長春から吉林迄特別列車を仕立て、全線の視察を行ひ、翌七年一月一日から愈々吉長鐵道の經營に當つた。

當時吉長鐵道の委任經營は利權の外溢として支那官民の間に批難の聲喧しく、殊に地元たる吉林では以前から排外熱の高い所で、民間有志連が色々と妨害運動など試みて、當時の吉長鐵道局長關鐸氏は賣國奴呼ばはりをせられて、隨分苦しい立場に立つて居た樣であつた。從て當時の狀勢では吉長全線の視察を行ふ際吉長鐵道の從事員が、我等一行に對して危害を加へんとも限らない狀態であつたが、幸に何等の出來事もなく圓滿に引繼ぎをすることが出來た。爾來赤字であつた吉長鐵道を我々の手で直し黑字にする爲めに、我々派遣員は非常なる努力をなし機關車、客車、貨車の最大能力を發揮せしめ、時々運轉規程をも無視して貨物の途中卸し等を行ひ、敏活に貨車を運用して營業成績を擧げ、大正七年の委任經營當初の成績は確か十萬圓許りの純益を擧げたと記憶して居る。

爾來年を重ぬるに從つて成績は良好になつて來て、立派に委任經營の實績を擧げたので、私は在任一年許りで

滿鐵本社に歸つたが、今茲に吉長鐵道在任中のエピソードを思ひ出の儘に綴つてみよう。

大正七年の四、五月の頃吉長鐵道委任經營引受に關する當面の措置が、先づ一段落付いたので、北京の支那政府交通部當局へ、新任挨拶の爲に行くことになり、關鐸局長と連れ立つて北京に赴いた。

當時の交通部總長は曹如霖氏であつたが、其頃自動車事故の爲め負傷して佛蘭西病院へ入院加療中であつた。しばらくして略快癒し、面會も出來るとのことで、病院に見舞つて挨拶をした。交通部次長は葉恭綽氏で氏は豫てより舊交通系の俊敏を以て鳴らして居り、此人との初對面は私としても非常な好奇心を以て期待して居たのであつたが、當日は滿鐵の交渉局主任唯根伊興君も北京出張中であつたので一緒に葉恭綽氏と逢ふことゝなり、關鐸局長と唯根君及私の三人で交通部の客廳で待つて居ると、一人の若い痩せて青い顏をした、風采の餘り揚らぬ人が出て來た。

私はこれは交通部の祕書官位に思つて居たら、關鐸局長が此青年に向つて非常に敬意を表して話して居るので、聞いて見たらこれが有名なる葉恭綽氏とのことで一寸驚いた。やがて關鐸氏の紹介で相互初對面の挨拶も濟んで、席に就いてから葉次長は徐々に口を開いて曰く、

『貴國で外國の鐵道の經營に當られるのは吉長鐵道が最初のことゝ思ふが、弊國では既に多くの鐵道を外國の經營に委ねて居ることは、御承知の通りだが、此吉長鐵道の委任契約は、其規程簡單で概要を規定するに過ぎないものであるが、貴國が實際の經營に當らるゝには必ずや規定してない樣な色々な事が起ることもあらう、其場合

には他の委任鐵道の列て隼濠して行つとう宜しからうと思ふ。猶遠隔の地に在つて貴下なり局長なりが、一々滿鐵なり交通部なりの指令を仰いで、經營に當ると云ふ樣なことは不便であるから、成るべく和衷協同貴下と局長との話し合ひで、現地で圓滑に經營して行くやうにして欲しいと思ふが、貴見如何。』

とのこと、私は突差の場合乍ら私かに思つた。日本として外國の鐵道を經營したのは初めての事であるに相違ないが、外國に鐵道の經營を委任するは別段誇る可き事でもないが、外國に委任しなければならない事は、寧ろ國としては恥辱としなければならない事である。然るに之れを相手に對して威壓的な言辭を用ゆるとは、以ての外の事だ。各國に經營を委任した各鐵道には各々夫れ相當の理由があり歴史があつて、委任されるに到つたのは、各鐵道の事情必ずしも同一でなく、而して元來法文の解釋は成文あるものは成文により、成文のない場合には其規程全體を蔽ふ精神によつて解釋し、この精神と矛盾せぬ範圍に於て、他鐵道の類似規定を引用する事は差支ないが、成文がないと云つて直ちに成立の基礎を異にする他鐵道の類似規定を引用すると云ふ、謬れることは稍々法の何物である事を解する人は容易に理解する處である。葉次長ともあらう者が之を知らぬとは心得ぬ話だ。これは一矢酬ゐなければならぬと考へ、

私は次の如く答へた。

『唯今の御話に依る現地に於て局長と和衷協同して圓滿に經營の處理に當り、指令を乞ふ場合は成る可く斟くすることに就ては、私も同意で今後局務を處理するに當り、務めて御高旨に副ふ樣努力致しますが、唯だ前段の吉

为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長鐵道委任契約に規定のない事は、他委任鐵道の規定に依るとの御高旨に就ては私は稍々意見を異にする、卑見によれば規定なき場合は吉長鐵道委任契約の全體の精神に依つて解釋し、此精神と矛盾せぬ範圍に於て他委任鐵道の規定を引用するは差支のない事であると思考しますが。』と述べた。

葉次長は何と云ふかと興味を以て顏を見詰てゐると、何と思つたか私の意見に別段異論も唱へず、

『兎に角局長と和衷協同して、成るべく現地にて問題を處理して、指令を乞ふことはない樣にせられたい事を希望する。』

と云つて別に問題にせず、須臾にして面談を終つて引取つたのであるが、同席して居た唯根伊興君は私に向つて曰く、

『今日の葉次長との對談に能くもあれ丈けの咄嗟應答が出來たなあ——君の心臟も相當のものだ。』

と云はれた事を覺へて居るが、此唯根君は當時滿鐵に於ては、心臟男として友人間に評判された人であることより思へば、私の心臟も萬更らでもなかつたと、今日に於て追想しては微笑を禁じ得ない思ひ出がある。

吉蛟線踏査記

住吉平治

京圖線が日支兩國間の懸案たりし吉會線を中心として建設せられ、兩國を結ぶ新交通路として、而も政治、經濟、國防上の重要路線であることは申す迄もなく、本線開通後逐年其重要性を加へつゝある現狀を見る時、過去を顧みて感慨一入深きを覺える。

茲に述べんとする吉蛟線とは吉會線の一部吉林・蛟河の路線であつて、此踏査は、明治四十四年八月滿鐵の鶴見技師が、時の陸軍大佐佐藤季治氏の依託に依て共同調査をしたのに始り、更に大正七年六月十八日の吉會鐵道借款契約締結せられたるに及び再び滿鐵では、第二回の踏査隊を派遣して精密なる調査を行つた。私も此一行に加はつて、主に經濟方面の調査を擔當し、越えて七年後の大正十四年、三度其一部を踏査することになつた。

此記錄は其時のもので、一行は清水參事を隊長に楫場・中田兩氏と、私の四名であつた。此地方は廣漠たる南滿と異なり、山岳重疊の密林地帶で、所謂滿洲馬賊の巢窟地帶として知られてゐたので、邦人の拉致を聞かされたことも再三ならず、其他の被害に於ては敢へて珍らしくなかつた。從つて踏査の時期も比較的安全な舊正月前

後を利用した。尤も、滿洲で線路の踏査に馬賊の危險は免れない條件の一つとされてゐたので、吾等も亦相當の覺悟はしてゐた。護衛兵として日本軍隊の掩護を懇願したところ、都合が悪いとのことで止むなく吉林保安騎馬隊十六名を派遣して戴いたが、餘り多人數も却て迷惑を感ずる場合もあるので、十名に減じて貰つた。十名でも未だ多いと思つてゐたが、領事や交渉署では萬一を慮つて、成る丈多く送りたい意向だつた。

△二月十二日▽

丁度厳寒の候とて零下二十何度に下ることもあつたが、殆ど無風狀態で身を刺す樣な酷い寒さを感ずることも少なく、一方積雪も例年尺餘を見るのに、此年は少量で慶嶺附近を除いては、僅かに二三寸に過ぎなかつた。橇の使用は當初は積雪が少いため多少懸念されたが、思ひ切つて踏査方法を變へ、橇を使用することにした。

調査萬端の準備を終へ、三臺の橇に分乘し、掩護の騎馬警察隊に守られ、幾分寒は曇りがちではあつたが、一同元氣一杯で午前十時に吉林を出發した。

途中吉林滿鐵公所に立寄り、本社との連絡をとり不用品を預け、吉林市街を拔け、松花江に沿つて走ること暫し、炮手四子にて松花江と別れ、進路を東に向け、濶葉雜木の點在する廟嶺を越え、正午大三家の部落に到著した。其處で思ひがけなく支那服を纏つた一人の日本人に會つた。名前は忘れたが、吉林の材木商で此處から、四十支里の揚樹林子に、木材取引に赴くと云ふ。單身斯かる奥地に入り決死の覺悟で活動する、其意氣には一同驚

嘆した。此の地方の事情に就いて、彼から聞いた話は、決して無駄ではなかつた。先を急ぐので別れを惜しみつゝ此處を出發、橇の快走に任せ、山路狹まり針葉樹の候嶺を一氣に越へ、大孤岔子に著いた。宿舍を定め夕食は携行の材料を以つて空腹を滿し、護衛隊に歩哨をなさしめ、田舍の炕の溫まりを程よく感じつゝ夢を辿つた。斯うして踏査第一日を無事に過ごしたのである。

△二月十三日▽

未明より出發の準備を整へ、七時大孤岔子を出發進むこと數支里にして、腰嶺に達した。

尺餘の積雪を疾走すること數支里にして額赫木の部落に到著した。こゝで中食にする。豚肉の外に三四品、この田舍では贅澤すぎる御馳走に思はず舌皷を打つ。さて出發となると掩護隊とこの家の主人らしいのと言爭ひをしてゐる。掩護隊の無錢飲食からだつた。昨日から食事毎にこれだ。これから先が思ひやられる。幾らかの支拂で解決した樣だつたが、金額が少ないらしいので、主人らしい男は不平面をしてゐた。

それから二三の部落を過ぎると、雜木が繁茂し、山は次第に峻險となり、やがて羅圈溝の部落に到著、こゝより蛟河には四道溝と慶嶺を越へる道がある。後者は橇の通行困難とのことであるが、我々の目的はこれを越へるにあるので、行ける限り進むことにして、五支里も來た時には陽は愈々傾く。慶嶺まで尙十支里。峠の難關を思ひ、止むなく附近の農家に宿を求めた。此一帶は大豆、包米、粟、高粱等を產するが、地方消費を滿すに過ぎ

す、煙草、麻類の生産はあつても其量は少い。他に枕木、燐寸の軸木、薪炭等を吉林方面に供給してゐる。

村人の話によると廖嶺越えは餘程困難だといふので、巾の廣い橇を俄かに改造した。

△二月十四日▽

道を積雪二尺餘の廖嶺に向けると、間もなく道は狹くなり、勾配は急で、頂上近くになると、一層雪は深く道路を全く見失ふ。濶葉樹の密林に橇の通行を阻止せられ、それ以上前進は不能となつたので、村人の案内で止むなくもと來た道に引返し別の道に入る。進むに從つて愈々急峻となり困難を覺えたが、漸くにして絶頂に迚ることを得た。ほつとして休んだのも暫し、それから道は下り急勾配で橇の進行に頗る危險を加ふるので、仕方なく徒歩にする。橇の顚覆や谷間に滑り落ちること幾度か、平素人通りの少い雪に隱れた道を探し求めつつ、約二支里にして吉會街道に出ることが出來た。本街道は吉林・蛟河間を結ぶ道路で、道幅も廣く人馬の往來も頻繁で、正午近く楊木溝に到著した。

此吉林に通ずる街道は農村の冬期閑散期に、橇で枕木運搬が行はれてゐるが、其數量は流材に比し運賃が高くなる爲僅少であつた。

更に進んで海青嶺を越える。峠にある老爺廟に暫く休息し、再び急傾斜な道を一氣に降りる。沿道は濶葉樹の密林で、馬賊の跳梁が最も甚だしいと聞いてゐたので、掩護隊も此地一帶が危險なることを察知してか、我々の

安全を期する爲には、一刻も早く此地域を脱けることが得策だと云つて、激しく馬に鞭打つ。所々に匪賊に襲はれて焼かれた廢殘の土壁が目にうつゝた。何だか我々は匪賊に追はれてゐる様な心地がしてならなかつた。軈て道は平坦となり、橇は益々速力を増すのであるがのろ〳〵して行くやうな感じだ。小雪の降る中を、ひた走りに走り續けたが、未だ危險區域を脱しないのに、陽は既に沒してしまつた。

危險を感じながらも仕方がないので近くの家を借り、何時もは二名の歩哨を四名に増して、早くから床には入つたが、容易に眠れない。誰一人聲を出すものもない。何時もの掛場さんの寝鼾も其晩は聞えなかつた。夜は益々更けて行くが、誰も眠れぬらしく、盛んに溜息や寝返り許りしてゐた。

噂に聞けば此家の主人の息子は三十幾つになり、幼い時から始末に終へない不良に育つたが、軈て馬賊の徒に投じ、今では相當羽振りを利かしてゐるとか。されば我々は馬賊の家に宿をしてゐるのも同じで、全くいゝ氣持はせず、野良犬が遠吠すれば思はず身顫ひをした。不安に怯えつゝ夜の明けるのが待遠しい。時間が氣にかゝり時計の針の進むのさへ殊更遲い様な氣がしてならなかつた。

△二月十五日▽

午前六時に起床。平常ならば賑やかに朝飯を濟まして出發するのだが、此朝ばかりは一同未だ落着かぬ氣持で着物を橇に積み、倉惶として此處を出發した。道は漸次展開する平地に延びて、一歩でも早く海青溝から離れた

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いと、二十支里を一息に走り續け、漸くにして北大屯の部落に到著した。此處まで來ればもう大丈夫と逃げる者の氣持でホッとする。其處の或る農家に入り朝食の準備をする。

北大屯は延吉街道から蛟河に至る分岐點で、此地一帶は頗る肥沃な土地であるが、耕地面積が狹小な爲農産物に重要なものはなく、朝鮮人の手になる水田がある許りであつた。東方の中天に巍然として聳ゆる拉法磊子は、恰度安奉線の鳳凰山によく似て、遠望[illegible]く風光佳絶にして頂上に祠れる廟近く湧出する靈泉は、長壽の効ありとして地方の名所として知ら[illegible]た。朝食を濟まし其處より道を南に向け、拉法河に沿ふて下ること十八支里にして今回の目的地であ[illegible]河に達し、當夜は我々日本人のみ吉林の井榮起業公司出張員の今村某氏の家に招かれ、支那料理を御馳走になり、久し振りに枕を高くして眠りに就くことが出來た。

此旅行記は紙面の都合により、これで駄筆を打切ることにするが、蛟河から先は地方の事情に精通する今村氏の言を參考にプランを樹て、蛟河を後に更に拉法河を下り、松花江に出で漂河を逆江して、樺樹林子の興吉公司所有の林區を視察し、此處に所期の用務を終へ松花江を下り、途中屢々匪賊の脅威は受けたものの、襲撃されることもなく歸途を急ぎ、吉林到著の前日の如きは五名組の馬賊と道で遭遇したが、護衛隊の人數が多かつたので、何等害も被らず、護衛兵等も又彼等を討伐することは、却つて吾等を保護する上に於て、寧ろ危險が伴ふので避けた爲、一同無事二月二十六日に吉林へ歸還したのであつた。

四鄭鐵路局時代の思ひ出

籠田定憲

支那側の對日反感の爲測量隊員は變裝して活動した（大正十一年四洮線工事）

一、馬賊の銃聲と花火

私は四鄭鐵路工程局工程司として滿鐵から派遣され、四平街での在任約四ケ年間と云ふものは、隨分思ひ出多い時代であつた。

大正五年の秋の頃だつた。結婚して間がなく、四平街の假宿舍（或る糧棧の一房で土造の炕生活）四平街から鄭家屯迄の大體の路線測量を終り、車站の敷地調査のため、現場に出張する事になつた。

愈々出發と云ふ前日、さゝやかな晩餐に向つて居る時、餘り遠くない處から、モーゼルの銃聲が二、三發聞えた。私も其當時は既にモーゼルの實包の音か、花火の音か位は聽き分ける程度の修養は出來て居たので、一寸吃驚はしたが、何分にも新妻を一人殘して明早朝から奥地へ向はふとする場合の事ではあり、そこは咄嗟の機智で、驚いて箸を置いて居る妻に對し、あれは何でもないよ。支那の風習として商賣人が商品が賣り切れるとよく夕暮に御祝の爲め花火をあげるんだよと、誤魔化しはしたものゝ、恐いもの見たしではあり、そゝくさと食事を濟ませ、局の用事とかこつけ、早速外に飛び出して見ると、やはり宿舍から一町許り離れた支那人の兩替屋に馬賊が押入つたのだつた。銅錢や鈔票の散亂してゐる土間の上に、掌櫃が朴に染つて倒れてゐた。

夕闇を透して銃聲のする西の方の平原を見ると、白馬に跨つた鐵路巡警の一隊が砂煙りをあげて、今や盛に追擊の最中であつた。

それから私は妻にはその事は話さず出張して、二週間後歸宅すると、宿舍は釘附けになつて居り、『主人不在中〇〇旅館に居ります。』と小さい紙片がはりつけてあつた。そんなことがあつてから、暫くは主人としての私は新妻の信用を得る事が出來なかつた。

二、生首の生つてゐる柳の木

四鄭鐵路の建設材料に就ては藤根總工程司の極めて聰明なる發案により、出來得る限り現地に於て調辨するといふ方針を採用された。今もあるあの四平街の局舍及び官舍、竝に沿線の各建物等の大部分は其材料を現地に求めたのである。從つて其建設費なども今日から考へると全く夢の樣に安價で、どの建物も坪當り單價が金の四拾圓から百圓程度であつた。

八面城驛の建築に著手し、愈々其木材の伐採に請負者の棟梁を引連れて、附近の部落へ出掛けた。丁度八面城から傳家店への中間部落に、柳の木の林がある事を兼ねて目をつけて居つたので、其處へ出掛けてみたところが、其林の端で道路に沿ふたひときわ大きい柳の木を見付けたので、ホーム廂の柱にでもと思ひ近寄つて見ると、なんと其木の枝に生首が、六つも生つてゐたのには、流石に日露の役に從軍し、永年鐵道守備隊にも居て、膽の坐つた棟梁もタヂタヂとなり、棟梁も斧を下す事が出來なかつた。これは前日附近で討伐された馬賊の首で、見せしめの爲めに曝してあつたのである。

三、馬賊と言葉

私は四年間の四鄭線生活中馬賊に二回遭遇したが、兩回共仁義ある當時の彼等の爲め、目こぼしの恩典に浴したが、同行の支那側大官連は何分にも浙江省あたりの南方人が多かつたので言葉が通ぜず、且つ持物などが贅澤であつた爲め、何時も彼等の爲めに裸にされてゐた。

そして當時の四鄭局の支那側役人連中が右の如く大部分浙江省あたりの南方出身で、歐米あたりで教育された連中だつたから、現場に於ける苦力との會話などは、私共日本人が通譯しなければならぬ有樣であつた。又局の何かの式典の時、支那役人中に正式の北京官話を話せる者がゐない爲、同文書院出のU氏が式辭の代讀をやるといふ事などもあつた。

滿洲國建設、大東亞建設といふ歴史的事實の上に於て、此の言葉といふ問題に就ては私は誠に興味深く考へてゐる次第である。

四、蒙古馬と酒の肴に皿

飛行機やトラックを利用出來なかつた大正初期の頃の、建設部隊にとつて唯一の交通機關は、小さな蒙古馬と二本の脚の外はなかつた。

總工程司の藤根氏は流石北海道で鍛へられただけあつて、其乘馬振りたるや誠に颯爽として本格的のものであつた。私も幸に馬の產地南部の育ちだつたから餘り苦勞はしなかつたが、他の東京、關西育ちの方々にとつては、あの小さな蒙古馬も相當惱みの種であつた。

特に岡山生れのS工程司、名古屋育ちのC工程司などは尠くとも一日の內には、五、六回はあの高粱畑や砂原の上に放り出される憂目を見るのであつた。

或日三江口の砂原で、身體肥滿のO工程司が嫌といふ程放り出され、おまけに御丁寧にも其馬の野郎、後足で二、三度ぱつ〳〵と砂をO工程司の頭の上へ掛けたものです。後足で砂を掛けられる樣は全くお話にならない。

鄭家屯や八面城附近には日本人としては、例の藥屋さんが一人か二人、他は天草突擊挺身隊の娘子軍位のもので、私共も支那の大官連中と同道で奧地を旅行する場合、其土地々々の商務會か何かの家に宿泊するのであるが、夜半何處からともなく洩れて來る、博多節か何かの哀調に誘はれて、よく其部隊本部を奇襲して、歡待を受けたものだつた。

處がそこには酒が豐富にストックしてあるが、さて肴となるとパイナップルと牛の鑵詰一點張りで、而も量に制限があるので、何時も興に乘じて來ると空になつた小皿や、どんぶり鉢をぽり〳〵かぢり出すのは、酒豪でならした熊本出身のA工程司であつた。A氏は其後酒の爲め京城で客死された事を聞いたが、滿鐵の多事多難の折柄殘念に堪えない。

需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com